

ドイツの中等教育学校初期段階における音楽科教科書の比較

— 将来の進路に基づく校種の違いに着目して —

梅林 郁子*

(2020年10月21日 受理)

A Comparison of Music Textbooks in the Early Stages of Secondary School in Germany:
Focusing on the Differences in School Types Based on the Future Course

UMEBAYASHI Ikuko

要約

ドイツの中等教育学校の音楽科教科書は、中等教育の初期段階となる第5・第6学年から、①高等教育への進学を前提としたギムナジウム、または進学の可能性がある校種と、②ギムナジウム以外で高等教育への進学の可能性がある校種、並びに中等教育で一般の学校教育終了を前提とした校種、用の2種類が作成される。そこで本論文では、Ernst Klett社による第5・第6学年用の①型 *Spielpläne 1* (2013) と、②型 *musik live 1* (2008) を対象として、「項目立て」、「作曲家・アーティスト」、「楽器」、「諸外国の伝統音楽」の観点から比較考察し、各々の特徴を明らかにする。

Spielpläne 1 は、*musik live 1* より約100ページ厚い。これは、やがて受験を迎えるアビトゥア(高等学校卒業兼大学入学資格)取得試験などを考慮してと考えられる。「項目立て」を見ても、*Spielpläne 1* では「楽典」、「形式」に全体の2割を宛て、音楽の学習に重点が置かれているが、*musik live 1* では「クリスマス」、「コンピュータで」など、生徒たちに身近な項目が立てられ、日常生活と音楽の関わりを重視している。また、*Spielpläne 1* では、クラシック、ポピュラー共に、西洋が主となっている音楽にのみ多くのページを充てているが、*musik live 1* では、少ないページ数のなかで、アジアやアメリカの伝統音楽も相応に学べるよう、編集されているといった違いが見られる。

キーワード：ドイツ、中等教育学校、ギムナジウム、音楽科、教科書、*musik live*、*Spielpläne*

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 准教授

1. はじめに

ドイツの学校制度は基本的に、4年間の初等教育の後に、5～9年間の中等教育が継続する形となっている。生徒たちは原則として、初等教育終了段階において、中等教育で一般の教育を終えるか、高等教育へ進むかを決定し、それに基づいて中等教育の校種を選択する。そして、高等教育に進むか否かの進路選択の結果は、既に中等教育学校のスタートとなる第5学年の教科書から、学習内容の違いという形で表れてくる。つまり教科書は、①高等教育への進学を前提としたギムナジウム、または卒業後に高等教育への進学の可能性がある校種、②ギムナジウム以外で高等教育への進学の可能性がある校種、並びに中等教育で一般の学校教育は終了することを前提とした校種、に対応した2種類が作成されるのである¹。

高等教育機関へと進学する生徒たちが、卒業時に受験するアビトゥア（高等学校卒業兼大学入学資格）取得試験では、音楽も選択科目のひとつとなっている。そのため、高等教育との接続を視野に入れた中等教育学校の音楽科の内容は試験準備としての性質も持ち、多くの内容を盛り込んでいるが、それ以外の校種ではそこまでの必要は無い。これは、音楽科教科書のページ数の単純な比較でもはっきりしており、第5・第6学年の教科書では、高等教育への接続を視野に入れた学校で用いる①型の教科書は、200～300 ページで構成されているのに対し、必ずしも高等教育に接続するとは限らない学校で用いる②型の教科書は150～240 ページとなっている²。因みに日本では、周知のとおり、高等学校卒業程度認定試験や、大学入学共通テストなどに音楽は含まれない。これを踏まえ、参考までに日本の第5・第6学年の音楽科教科書のページ数を見ると、『音楽のおくりもの』5・6（2020、教育出版）が変型AB版で2学年分併せて全157 ページ、『小学生の音楽』5・6（2020、教育芸術社）がAB版で同じく全174 ページで、これは、ドイツの②型のなかでも、ページ数の少なめな教科書とほぼ一致している。

日本でもこれまで、ドイツの音楽科教科書に関する研究や日本の教科書との比較研究は複数行われてきた。しかし、日本とは異なる教育システムを反映して作成されるドイツの教科書について、校種の違いを考慮した研究は行われてこなかった。そこで本研究では、中等教育の初期段階となる第5・第6学年の①型と②型の音楽科教科書を対象として、「項目立て」、「作曲者・アーティスト」、「楽器」、「諸外国の伝統音楽」の4つの観点から比較考察し、それぞれの教科書の特徴を明らかにする。

¹ 教科書の出版社は、それぞれ自社の教科書が使用できる連邦州と校種をウェブサイトで公表している。第5・第6学年用の音楽科教科書の出版社については、本稿末に「引用・参考ウェブサイト」としてトップページのURLを掲載する。

² ドイツでは、日本と異なり、教育課程の基準は連邦州毎に定めることとなっており、教科書の採択方法も州によって異なる。そのため、教科書の内容も出版社が独自に、あるいは使用する州の意見を取り入れて作成するので、教科書のページ数に大きなバラつきがある。

また、ドイツの中等教育学校の音楽科教科書は、一般に2学年分以上が合本となっている。

2. 第5・第6学年の音楽科教科書と考察対象とする教科書

【表1】は、ドイツで出版されている、第5・第6学年の現行の音楽科教科書を一覧にしたものである。日本の音楽科教科書が、2つの出版社から1種類ずつの計2種類が全てであるのと対照的に、ドイツの教科書は種類が多く、1つの出版社が複数の教科書を出版している場合もある。

【表1】第5・第6学年の音楽科教科書³

出版社	教科書名	型
Cornelsen	<i>Dreiklang</i>	①
Helbling	<i>Club Musik 1</i>	①
	<i>MusiX1</i> (州等別に4版ある)	①
	<i>im · plus 1</i>	②
Ernst Klett	<i>Spielpläne 1</i>	①
	<i>musik live 1</i>	②
Mildenberger	<i>Rondo 5/6</i>	②
Schroedel	<i>Musik um uns S1</i> (州・校種別に3版ある)	①
	<i>Sound check 1</i> (州等別に3版ある)	①
	<i>Töne 1</i>	②

本稿ではこのうち、①型と②型各1種類を出版している Ernst Klett 社の、①型 *Spielpläne 1* (2013、全248ページ) と②型 *musik live 1* (2008、全151ページ) (いずれも変型 B5 版で、第5・第6学年合本) を比較考察の対象とする⁴。両教科書が認可されている連邦州と校種については、本論文末に資料【表6】として示すので、参照されたい。尚、以下本論文では、対象とする教科書について巻数1の表記は省略する。

3. 先行研究

これまで、アビトゥアの受験や、高等教育への進学の有無を視野に入れた教科書の比較研究は行われてこなかった。そのため、本項目では関連する先行研究を示す。

まず、本研究で比較考察の対象とする、ギムナジウムを主な使用校種とする①型の教科書 *Spielpläne* を扱った研究として、山原 2004 が鑑賞における理念とその方法の具体化について、若宮 2014 が *Spielpläne* と、そのオーストリア版である *Klangfarben* の比較考察を行っている。但し、ここで研究対象として扱われている *Spielpläne* は、若宮が 2003 年版、山原が 1995 年版⁵で、

³ 教科書名の後に、1と書かれている本は、第5・第6学年の合本を意味する。

型は、各出版社のウェブサイトに掲載されている情報に拠り、判断した。

また、この表に記載した教科書の他に、特別支援学校の第5・第6学年の音楽科教科書として、Cornelsen 社の *Klick! Musik 5/6* と Konkordia Wolf Dürr und Kessler 社の *navi Musik* がある。

⁴ 註2でも述べたように、ドイツでは国全体で統一された教育課程が無いいため、教科書の改訂時期も出版社や教科書によって、まちまちである。

⁵ 山原の対象教科書は、論文内に示されている目次の内容(山原 2004: 24)から、1995年版と判断した。尚、ドイツでは新版の教科書が出版されても旧版が出版停止になることはない。そのため、本稿執筆現在においても、2003年版は出版・販売されている。

いずれも現在では旧版であり、各々含まれる内容はかなり異なっている。次に、ギムナジウムを含めない②型の教科書の先行研究としては、伊藤 2008 がある。伊藤は、Mildenberger 社から出版されている *Rondo* の第5～10 学年に相当する教科書について、電子楽器や伝統楽器も含めた楽器の扱いに関する研究を行っている。

また、本論文では、①型の教科書の内容とアビトゥアの試験問題の関連について具体的な考察は行わないが、アビトゥアの試験問題内容の全体的な傾向を把握するにあたって、中島 2014、2016、木戸 2017 を参考とした。

4. *Spielpläne* と *musik live* の比較考察

4. 1. 項目立て

初めに、両教科書の項目の立て方を比較考察する。

【表2】に示す様に、①型の *Spielpläne* では大きく 11 の、②型の *musik live* では 8×2 で 16 の項目が立てられている。*Spielpläne* の方が *musik live* と比較して 100 ページ程厚いので、当然ながら一項目は *Spielpläne* の方が長く、各項目についての説明も詳細になっている。

【表2-1】*Spielpläne* の項目立て

番号	項目名	ページ数
1	アウフタクト Auftakt	6・23
2	話すーラップするー歌う Sprechen-Rappen-Singen	24・81
3	ダンス・ワークショップ Tanzwerkstatt	82・95
4	楽典 Musiklehre	96・127
5	形式における音楽 Musik in Form	128・141
6	クラス・バンド Klasse-Band	142・155
7	響きの実験とオーディオ・ドラマ Klängenexperimente und Hörspiele	156・169
8	楽器の属 Instrumentenfamilien	170・185
9	聴くことー音楽を聴く Hören-Musik hören	186・201
10	芸術家の肖像 Künstlerporträts	202・229
11	音楽劇場 Musiktheater	230・239

【表2-2】*Musik live* の項目立て

番号	項目名	ページ数
1-1	私、君ー私たち Ich, du-wir	4・17
1-2	ツアーで Auf Tour	18・25
1-3	気分と表現 Stimmung und Ausdruck	28・33
1-4	クリスマス Weihnachten	34・41
1-5	カーニバル Karneval	48・53
1-6	太陽系の旅行 Reise durch das Sonnensystem	54・57
1-7	外と中で Draußen und drinnen	62・67
1-8	ミュージック・ライブ Musik live	68・71
2-1	世界旅行 Eine Weltreise	72・79
2-2	音楽のメッセージ Musikalische Botschaften	86・91
2-3	バロックへの時間旅行 Zeitreise ins Barock	100・105
2-4	コンピュータで Am Computer	108・111

2-5	ミュージック・ライブ Musik live	116 - 119
2-6	テレビと映画 Fernsehen und Film	120 - 127
2-7	感情を伴う歌 Lieder mit Gefühl	128 - 133
2-8	ミュージック・ライブ Musik live	134 - 139

また、*Spielpläne* では項目名からも、「楽典」、「形式における音楽」、「楽器の属」、「芸術家の肖像」など、楽典・楽器・音楽史といった音楽の学習に重点を置いた構成となっており、特に「楽典」と「形式における音楽」に、全体の約2割となる45ページが充てられている。一方、*musik live* では項目に「クリスマス」、「カーニバル」、「旅行」、「コンピュータ」など、季節のイベントや身の回りの物を挙げており、音楽そのものだけでなく、生徒たちにとって身近に感じられる具体的な項目も表題として取り上げている。このような項目立てからも、音楽を学習させる①型の *Spielpläne* と、日常生活のなかに音楽を取り込む②型の *musik live* の構成の違いが見て取れる。但し、*musik live* は楽典などの学習を全く取り入れていないわけではなく、各項目のなかに織り込んでいる他、番号のある項目の間にところどころ挿入されている「基礎 Basics」と、巻末の「音楽の知識 Musikwissen」で、楽典や楽器についての知識を補わせるようになっている。

4. 2. 作曲者とアーティスト

4. 2. 1. 世紀ごとの扱い方

どちらの教科書とも作曲者、並びにポピュラー・ミュージックなどのアーティストについては、バロック以降から現代までの人々を幅広く取り上げている。ここで扱われている作曲者とアーティストについて、生年、またはグループの設立年を基準として世紀別に分類したものが【表3】である。

【表3】 *musik live* と *Spielpläne* で扱われている作曲者とアーティスト

1601年～1700年代		
<i>musik live</i> のみ	両教科書に共通	<i>Spielpläne</i> のみ
A. Vivaldi (1648-1741)	J. Pachelbell (1653-1706) J. S. Bach (1685-1750)	J. Playford (1623-1686) M. A. Charpentier (ca.1634-1704)
1701年～1800年代		
<i>musik live</i> のみ	両教科書に共通	<i>Spielpläne</i> のみ
L. Mozart (1719-1787) L. v. Beethoven (1770-1827) G. Rossini (1792-1868)	J. Haydn (1732-1809) W. A. Mozart (1756-1791)	
1801年～1900年代		
<i>musik live</i> のみ	両教科書に共通	<i>Spielpläne</i> のみ
E. Grieg (1843-1907) G. Holst (1874-1934)	J. Offenbach (1819-1880) C. Saint-Saëns (1835-1921)	H. Berlioz (1803-1869) F. Mendelssohn (1809-1847) R. Schumann (1810-1856) B. Smetana (1824-1887) S. Prokofiev (1891-1953)

1901年～2000年代		
<i>musik live</i> のみ	両教科書に共通	<i>Spielpläne</i> のみ
O. Messiaen (1908-1992) S. Reich (b.1936) F. Rzewski (b.1938) B. Marley (1945-1981) Coolio (b.1963) Zap Pow (活動期間 1969-1979) Buena Vista Social Club (活動期間 1996-2015) 花兒樂隊 The Flowers (活動期間 1998-2009)	/	J. Françaix (1912-1997) C. Berberian (1925-1983) E. Rautavaara (1928-2016) D. Schnebel (1930-2018) K. Penderecki (1933-2020) E. John (b.1947) G. Stäbler (b.1949) M. Jackson (1958-2009) Nena (b.1960) Deep Purple (活動期間 1968-) L. Feist (b.1976) Die Fantastischen Vier (活動期間 1986-) White Stripes (活動期間 1997-2011)

まず、17世紀と18世紀を見ると、*musik live*と比較して、*Spielpläne*で扱っている作曲者の数は17世紀ではほぼ同じ、18世紀ではむしろ少ない。*Spielpläne*は*musik live*より100ページ程度厚いことを考慮すると、*Spielpläne*ではこの時代について多くの作曲者を取り上げるよりも、ひとりの作曲者とその関連事項を、様々な観点から学ばせようとしていると考えられる。

その一方で、19世紀以降の作曲者やアーティストについては、*Spielpläne*では*musik live*より多数の人々を取り上げようとする傾向が見て取れる。また、20世紀以降では、どちらの教科書でもいわゆるシリアス・ミュージックとポピュラー・ミュージックの双方が扱われるが、取り上げられている作曲者やアーティストは共通していない。そして、両教科書のどちらも20世紀後半はポピュラー・ミュージックのアーティスト一色となるが、*musik live*では、レゲエを代表するボブ・マリー Bob Marley やザッポウ Zap Pow、キューバ音楽のブエナ・ヴィスタ・ソシアル・クラブ Buena Vista Social Club など、南米の音楽を多く扱っているのに対し、*Spielpläne*では、現在では外国独特の音楽とは見なしづらいロックやポップを除き、特定の国や地域の音楽に焦点を当てていない。むしろ逆に、ネーナ Nena やディ・ファンタスティッシェン・フィア Die Fantastischen Vier など、ドイツ国内の代表的なアーティストを取り上げていることが特徴的である。

4. 2. 2. 両教科書で共通して取り上げられている作曲者の扱い方 — バッハを中心として

本項では、【表3】の両教科書で共通に取り上げられている作曲者6人のうち、ヨハン・セバスチアン・バッハ Johann Sebastian Bach を中心として、双方の教科書における扱い方を考察する。バッハは*musik live*では「2-3. バロックへの時間旅行」の項目のなかで「ヨハン・セバスチアン・バッハはこのように生きた So lebte Johann Sebastian Bach」(pp.104-105)として2ページにわたって取り上げられ、*Spielpläne*では、「10. 芸術家の肖像」のなかで、「ヨハン・セバスチアン・バッハを知る Johann Sebastian Bach kennenlernen」(pp.204-209)として3倍の6ペー

ジが充てられ、2ページずつ(1)~(3)に分けられている。

まず *musik live* では、バッハが住んだ町が記された地図と、バッハの生涯を記した文章が5分割で提示され、この文章に対して、「5つのうち1つを選択して読み、そのテキストについて質問し合う」、「テキストと地図の町を合わせる」、「バッハがオルガニストと作曲家としての能力をどのようにして身に付けたか説明する」、「バロック時代には音楽は、どのような場所で演奏され、聴かれたか」という4つの課題が出されている。ここではテキストに併せて、3曲ほど鑑賞用の曲が用意されているが、課題からは音楽そのものや鑑賞よりも、音楽史の流れのなかでバロックやバッハについて学ぶことが主となっているように捉えられる。

一方、*Spielpläne* では、(1)でまず、バッハの《メヌエット *Menuett*》ト短調 BWV Anh. II/115 (作曲年不詳)⁶の全曲の楽譜が掲載され、その後にユリアという名の生徒と友達との架空のグループ討議が展開される。これは、ピアノを習っているユリアが、次回のレッスンでこの曲の特徴を説明しなければならず、彼女にアドバイスを求められた友人たちが、話し合いのなかでリズムや形式について気付いたことを提案する、というものである。これを踏まえ、(2)では、バッハの生涯とメヌエットの背景について、簡単な説明がなされ、続いて、《平均律クラヴィーア曲集 *Das Wohltemperierte Klavier*》第1巻第1番 BWV 846 (1722)のプレリュードの楽譜が11小節ほど掲載される(冒頭4小節のみ【譜例1】に示す)。そしてこの曲を基に「符頭を方眼紙に書き写し、反復するリズムを把握する」、「最初の4小節の和声進行を把握する」、「この和声進行を用いて、原曲の音符やリズムを並べ替え、独自のプレリュードを作曲する」という課題が提示される。



【譜例1】《平均律クラヴィーア曲集》第1巻第1番 BWV 846 プレリュード 第1~4小節

(3)では、ライプツィヒ時代のバッハが遵守しなければならなかった雇用契約の文書を読ませた上で、「上司との関係も踏まえ、バッハがどのような仕事をしなければならなかったのかを説明する」、「礼拝における音楽で、バッハが気を付けなければならなかったことは何か」の課題が提示される。その後、礼拝音楽との関わりでパイプオルガンが説明され、幻想曲のジャンルについてイメージを持たせた上で、バッハの《幻想曲とフーガ *Fantasia und Fugue*》ト短調 BWV542 (ca. 1720)を鑑賞させ、生徒たちに幻想曲についてのイメージを話し合わせ、比較させることで終了となる。

このように *Spielpläne* のバッハの項目は、バロック時代の音楽家の在り方、メヌエットやファンタジーのジャンルの特性、作品の鑑賞、創作など、単に音楽史のなかでバッハを学ばせるだけでな

⁶ 但し、現在では、この曲はバッハではなく、クリスティアン・ペツォルト Christian Petzold (1677-1733)の作品と考えられている。

く、バッハを軸として、発展的な音楽の学習に結び付けられている。それだけでなく、*Spielpläne* の課題は、全体としてかなり高度な要求がなされている。例えば、独自のプレリュードを作曲するには、音符が読めることはもちろん、リズムや拍子、和声進行を理解していなければこなすことができない。これは【表2-1】で示したように、*Spielpläne* では教科書全体の2割を楽典と形式の学習に充て、基本的な事項を全て学習させているからこそ、展開が可能な課題となっている。また音楽以外についても、例えば、バロック時代の雇用契約の文書を読むといった課題は、読後のグループ討議により皆で内容を共有するにしても、第5・第6学年の生徒たちにとっては、理解に際し、かなりの読解力が必要とされるであろう⁷。

このような学習は、*Spielpläne* が *musik live* の3倍のページ数をバッハに割り振っているからこそ可能となっている。そしてこれは、バッハだけでなく、両方の教科書に共通で取り上げられている作曲者のうち、ヨーゼフ・ハイドン Joseph Haydn やカミーユ・サン＝サーンス Camille Saint-Saëns についても、同様の取り扱いがなされている。このように *Spielpläne* は、*musik live* と比較して、バロックからロマン主義までの作曲家や作品に関して、音楽自体について、また音楽と関連する学習についても、様々な観点からの発展的な学習が可能となる分量や内容で構成されているのである。

4. 3. 楽器

楽器については、どちらの教科書においても鍵盤楽器、弦管打楽器、電子楽器などが取り上げられていることに相違は無い。しかしここでも、*musik live* と *Spielpläne* の内容は大きく異なる。まず、*musik live* では、楽器は【表2-2】で挙げた番号の振られた項目のなかではなく、主に項目間に設けられている「基礎」で学習を行うようになっている。【表4】は、楽器について取り上げている「基礎」の項目名を示すもので、ここに挙げた16ページ分の項目を全て学習すると、管楽器を除いてほぼ満遍なく一通りの楽器についての知識が得られるように構成されている。管楽器については、番号の振られた項目のなかで扱われているが、これについては後述する。

【表4】 *musik live* の「基礎」における楽器に関連する項目

項目名	ページ数
鍵盤楽器と仲間たち Keyboard & Co.	46 - 47
ヴァイオリン Die Geige	58 - 59
オーケストラ Das Orchester	60 - 61
弦は響きを作る Die Saite macht den Klang	80 - 81
様々なギター Verschiedene Gitarren	82 - 83
ギター小課程 Kleiner Gitarrenlehrgang	84 - 85
ドラムセット Das Drum Set	112 - 113
ドラムのスタイル Drum Styles	114 - 115

⁷ この雇用契約の文書は、第5・第6学年の生徒たちが理解しやすいように書き直されたものではなく、Schulze (ed.) 1989: 100-101 から引用された原文である。

一方で、*Spielpläne*における楽器の学習は、「6. クラス・バンド」(pp.142-155)と「8. 楽器の属」(pp.170-185)の計30ページに概ねまとめられており、「6. クラス・バンド」では、エレキギター、エレキベース、キーボード、ドラムセットについて各楽器2ページずつ、「8. 楽器の属」では、木管楽器のエアリード楽器、リード楽器、金管楽器に2ページずつの他、弦楽器と鍵盤楽器に併せて6ページが充てられている。

両教科書の楽器に関する項目を概観したところで、*musik live*のなかで唯一、番号の振られた項目で取り上げられている管楽器について見ておきたい。管楽器は「1-7. 外と中で」の「オーケストラのなかの鳥のコンサート *Vogelkonzert im Orchester*」(pp.66-67)で、木管のエアリード楽器のみの扱いとなっている。この項目では、オリビエ・メシアン Olivier Messiaen の《鳥たちの目覚め *Réveil des oiseaux*》(1953)とルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン Ludwig van Beethoven の交響曲第6番《田園 *Pastorale*》(1808)第2楽章の一部を聴き比べさせ、まず、両作品の該当部分がどのように鳥の声を表現しているか考えさせる。その後、《田園》に登場する3種類の鳥、「ナイチンゲール、ウズラ、カッコウがどの楽器で演奏されているか」、「その鳴き声が何度聞こえたか」、「ナイチンゲールの声を担当するフルートの響きを説明する」といった課題が続く。そして最後に、フルートが、ウズラを担当したオーボエや、カッコウのクラリネットと同じ木管楽器であることと、フルートの構造が簡単に説明される。

一方、*Spielpläne*において、管楽器は「8. 楽器の属」のなかで、「木管楽器：フルート Holzblasinstrumente: Flöten」(pp.174-175)、「木管楽器：リード楽器 Holzblasinstrumente: Rohrblattinstrumente」(pp.176-177)、「金管楽器 Blechblasinstrumente」(pp.178-179)で扱われているが、ここでは *musik live*での扱いと対比するため、「木管楽器：フルート」のみを取り上げる。この項目では、初めに中世やルネサンスの絵画⁸と共に、フルートの歴史が述べられ、ブロックフルートからフルートの流れを学習させた上で、それぞれの音の発生のメカニズムを学ばせる。最後に、ジョン・プレイフォード John Playford の《ニューキャッスル *Newcastle*》(1651)のソプラノ、テノール、バスのブロックフルートによる演奏で、声部の聴き分けをさせて、各楽器の音色の違いに注意を向けさせる⁹。

このように、*musik live*では、日常生活のなかに聞こえる鳥の声から音楽を意識させて、管楽器の音に触れさせるが、*Spielpläne*では、楽器の歴史・構造や、曲の声部の聞き分けといった、音楽

⁸ フランチェスコ・バッサーノ Francesco Bassano (1549-1592) 画『フルートと子ども *Knabe mit Flöte*』(1585/90) (ウィーン美術史美術館蔵) など。

⁹ 尚、*Spielpläne*では、*musik live*とは別の形で、鳥の声と音楽の関わりを「9. 聴くこと — 音楽を聴く」の「音楽における自然の声 — カントゥス・アルクティクス」の項目で取り上げている。ここでは、項目名の通り、エイノユハニ・ラウタバーラ Einojuhani Rautavaara の《カントゥス・アルクティクス *Cantus Arcticus*》(1972)を教材として、録音された鳥の鳴き声と、オーケストラの音型の関連性を学ばせ、創作に繋げている。

史、楽器学、楽曲構成を学ばせる内容となっている。また、先にも述べたように、*Spielpläne*では、管楽器については他に木管のリード楽器と金管楽器に2ページずつを充て、それぞれについても同様の充実した学びができるように構成されている。全体として楽器についても、*musik live*に対して *Spielpläne*では2倍弱のページ数が用意されており、そのため、管楽器以外の各楽器についても同様に、様々な角度から学ばせる傾向が見られる。

4. 4. 諸外国の伝統音楽

先に「4. 2. 作曲者とアーティスト」の「4. 2. 1. 世紀ごとの扱い方」で、諸外国のポピュラー・ミュージックについて取り上げたが、本項目では、ここで対象としなかった、諸外国のいわゆる伝統音楽を中心として、比較考察を進めたい。【表5】に、両教科書における該当項目を示す。

【表5】 *musik live* と *Spielpläne* における諸外国の伝統音楽に関連する項目

<i>musik live</i>		<i>Spielpläne</i>	
項目名	ページ数	項目名	ページ数
2-1. 世界旅行 Eine Weltreise	72 - 79	3. ダンス・ワークショップ Tanzwerkstatt	84 - 95
中国からの音楽 Musik aus China	72 - 73	レットキス — フィンランドの民族舞踊からポップダンスへ Letkiss - vom finnischen Volkstanz zum Poptanz	88
ナヴァホのパウ・ワウ Pow Wow bei den Navajo	74 - 75	クラコヴィアク — ポーランドのダンス Krakowiak - ein polnischer Tanz	89
トルコのダンス Ein türkischer Tanz	76 - 77	エレヴ・ヴァー — 夕方になる Erev Ba - Der Abend kommt (イスラエル)	90
南アメリカからの歌 Ein Lied aus Südamerika	78 - 79	ウチュ・アヤク — 簡単なトルコの民族舞踊 Üç ayak - ein einfacher türkischer Volkstanz	91
		ポロネーズのなかに空間の道を見い出す Raumwege erfinden in einer Polonaise	92

これまでに何度か言及しているように、*Spielpläne*は *musik live* より100ページ程厚いことから、様々な項目において、*Spielpläne*の方が充実した内容を示すものとなっていた。しかし、諸外国の音楽については、*Spielpläne*が厚さに比例したページ数になっているとは言い難い。

まず *musik live* では、諸外国の伝統音楽に8ページを充て、【表5】に挙げたアメリカ、アジアそれぞれの音楽を取り上げている。一例として、「中国からの音楽」の内容を見てみたい。この項目では、初めに《ゴング・ナム・ツァオ *Gong Nam Zao*》という広東省の民謡が、原語とドイツ語の翻訳を付して歌唱教材として扱われ、それを基に五音音階を学ばせる。次に、伝統的な中国の楽器として琴や銅鑼などが説明される。その上で、中国のバンド花兒楽隊 *The Flowers* の曲 《シー・シュア・シュア *Xi Shua Shua*》(2005) の楽譜の一部が掲載され、現代中国のポピュラー・ミュージックにも、五音音階が用いられていることに注意を向けさせる形となっている。他の国々についても同様に、いずれも伝統的な歌曲、ダンス、楽器を取り上げ、歴史や背景についても説明を加えている。

一方、*Spielpläne* はダンスに特化する形で民族音楽を扱っているため、ポーランドやトルコについては、若干ダンス音楽の説明がなされてはいるものの、全体としてはほぼダンス・ステップの説明に終始しており、その背景についての言及はなされない。この「3. ダンス・ワークショップ」の他に、*Spielpläne* では「2. 話す — ラップする — 歌う」の項目に「国境を越えて(1)~(3) (pp.76-81) が設けられ、5曲の歌曲が掲載されている。しかし冒頭に「ここで君たちは、他の国や国境 — 例えば、異国との、あるいは、ファンタジーの国との国境 — を越えた人々に関する歌曲を見ることでしょう」¹⁰ (p.76) と記されているように、ここで扱われている歌曲は、アイルランド民謡《ゴールウェイのバグパイブ吹きティム *Piper Tim of Galway*》の他は伝統音楽ではなく、外国、またはファンタジーの国のイメージと関わる音楽になっている。さらに楽譜と歌詞のみの掲載で、学習課題も示されない。唯一、アメリカの歴史を扱った《コロンブスと名乗る男 *Ein Mann, der sich Kolumbus nannt*》(1936) について、1492年10月12日にハイチに到着したクリストファー・コロンブス Christopher Columbus (ca. 1451 - 1506) の銅版画と、ドイツ語に訳された翌日及び翌々日の彼の日記が示され、日記を参考として絵を説明するよう課題が示されている。しかし、この曲は元がドイツ民謡である¹¹ことから、外国の伝統音楽そのものの背景などを学ぶ課題とはなっていない¹²。

このように、*musik live* では、第5・第6学年の生徒たちに、歴史や背景も含めてアメリカやアジアの伝統音楽・楽器・ダンスについて学ばせる項目を設けている。それに対して *Spielpläne* では、外国の伝統音楽に対して設定されているページ数が、全体のページ数に比して少ないだけでなく、曲からその国の音楽や背景などを学ばせるような課題も設けられていない。また、扱っている地域も、ヨーロッパとアジアに限定されている。これは、「4. 2. 作曲者とアーティスト」の「4. 2. 1. 世紀ごとの扱い方」で述べた、*Spielpläne* のポピュラー・ミュージックにおける外国音楽の扱いの少なさに共通した傾向である。全体として *musik live* より100ページ程厚いにも関わらず、*Spielpläne* の外国の音楽を教材として取り上げようとする姿勢は、*musik live* と比べて消極的と捉えられる。

¹⁰ Hier findet ihr Lieder aus anderen Ländern und Lieder, die von Menschen handeln, die Grenzen überschreiten - z.B. Grenzen zu fremden Ländern oder zum Land der Fantasie...

¹¹ ドイツ民謡《私は医者アイゼンバルト *Ich bin der Doktor Eisenbart*》(ca. 1800) の替え歌としてドイツの子どもたちに良く知られている。

¹² その他の3曲は、以下の通り。オランダの劇作家ヘルマン・ヴァン・ヴェーン Herman van Veen (b. 1945) の原作を基に、独・蘭・仏・日合作で制作されたアニメーション『小さなアヒルの大きな愛の物語 あひるのクワック *Alfred J. Kwak*』(1989) のなかの1曲で、ヴァン・ヴェーン他によって作詞・作曲された《スペッター・ピーター・ペーター *Spetter Pieter Pater*》。ミルコ・フランク Mirko Frank (生年不明) の子ども向けのアルバム《ミルコの歌の夕べ — 子どものレゲエと海 *Mirkos Liederabend - Kinder Reggae & Meer*》(2013) から《海蛇の歌 *Seeschlangensong*》。ベートーヴェンの《8つの歌曲 *Acht Gesänge und Lieder*》より〈マーモット *Marmotte*〉op.52-7 (1792)。

5. まとめ

ドイツの中等教育学校の音楽科教科書は、中等教育の初期段階となる第5・第6学年の時点から既に、①高等教育への進学を前提としたギムナジウム、または卒業後に高等教育への進学の可能性のある校種と、②ギムナジウム以外で、高等教育への進学の可能性のある校種、並びに中等教育で一般の学校教育は終了することを前提とした校種、の2種類に対応して作成される。この点に着目し、本論文では Ernst Klett 社から出版されている①型の教科書 *Spielpläne* (全 248 ページ) と②型の教科書 *musik live* (全 151 ページ) の第5・第6学年用となる第1巻について、「項目立て」、「作曲者・アーティスト」、「楽器」、「外国と関わる音楽」の4つの観点から比較考察し、各教科書の特徴を論じてきた。

まず「項目立て」については、*Spielpläne* では「楽典」、「形式」、「聴くこと」といった項目名から、楽典・楽器・音楽史など、音楽を学習させることに重点が置かれていることがわかる。それに対して *musik live* では「クリスマス」、「カーニバル」、「コンピュータで」など、生徒たちにとって身近なイベントや馴染みのある物を項目名として立てており、日常生活と音楽との関わりを重視した構成となっている。

次に「作曲者・アーティスト」の扱いについては、どちらも数としては近・現代の人々を多く取り上げている。特にポピュラー・ミュージックについて、*musik live* では、レゲエやキューバ音楽など外国の特徴ある音楽を扱っているのに対し、*Spielpläne* では、むしろ自国のアーティストに目を向けさせている。一方、バロックからロマン主義までの両教科書に共通に取り上げられている作曲者を比較考察すると、*Spielpläne* ではひとりにつき *musik live* の3倍のページ数を充てるなどし、ひとりの作曲者を軸としながらも、音楽史、曲のジャンルの特性、鑑賞、創作など、幅広く、また発展的な学習に結び付けている。このような学習が可能な背景として、*Spielpläne* では教科書全体の2割が楽典に充てられていることも注目すべきであろう。また、「楽器」の扱いについても同様で、*Spielpläne* は *musik live* の2倍程度のページ数を充て、音楽史や楽器学、そして楽器の扱いと共に取り上げられる楽曲の構成にも注意を向けさせる内容となっている。

しかし、「諸外国の伝統音楽」については、少ないページ数のなかで、アジアやアメリカの音楽を取り上げている *musik live* に対して、*Spielpläne* では外国の伝統音楽に多くのページを充てることをせず、また、楽曲をその背景・歴史・楽器の学習に結び付けることもない。このように、クラシックであれポピュラーであれ、西洋が主となっている音楽については、*Spielpläne* は大変多くのページを割り振り、様々な角度から音楽の学習ができる手立てを示しているが、諸外国の音楽については、その編集の姿勢が大きく異なっていると言えよう。

本稿では、*musik live*、*Spielpläne* とともに第5・第6学年用の第1巻に限定して比較考察を行った。これらの教科書は上級学年用に、*musik live* では第7～9学年用の第2巻、*Spielpläne* では第7・8学年用の第2巻、第9・10学年用の第3巻、そして第10～13学年用の『上級 *Oberstufe*』が用意されている。この続巻の教科書を概観すると、*Spielpläne* では外国の音楽について、ポピュ

ラー・ミュージックではスカ、レゲエ、ソウルなどを取り上げているが、伝統音楽は第1巻同様、ページ数に比してやはり扱いが少ない。この点については、より詳細な比較考察が必要だが、その際には、このような特徴が両教科書の出版社 Ernst Klett 社固有の編集方針なのか、教科書を使用している各州が個別に設定している教育目標を反映しているものなのか、さらには、アビトゥア取得試験の出題傾向が西洋音楽に重点を置いていることと関連するものかなど、様々な可能性の検討も必要と考える。今後の課題としたい。

資料

【表6】 *musik live* と *Spielpläne* が認可されている連邦州、及び校種

連邦州名	校種		
	<i>musik live</i> のみ	両教科書共通	<i>Spielpläne</i> のみ
Baden-Württemberg	Hauptschule Werkrealschule	Realschule Gemeinschaftsschule	Gymnasium
Berlin		Integrierte Sekundarschule Gemeinschaftsschule	Gymnasium
Brandenburg		Oberschule Gesamtschule	Gymnasium
Bremen		Oberschule	Gymnasium
Hamburg		Stadtteilschule	Gymnasium
Hessen	Hauptschule	Realschule Mittelstufenschule Gesamtschule	Gymnasium G8 Gymnasium G9
Mecklenburg-Vorpommern		Schulartunabhängige orientierungsstufe Regionalschule Gesamtschule	Gymnasium
Niedersachsen	Hauptschule	Oberschule Realschule Gesamtschule	Gymnasium G8 Gymnasium G9
Nordrhein-Westfalen	Hauptschule	Realschule Sekundarschule Gesamtschule	Gymnasium
Rheinland-Pfalz		Realschule Plus Gesamtschule	Gymnasium
Saarland		Erweiterte Realschule Gesamtschule Gemeinschaftsschule	Gymnasium
Sachsen		Oberschule	Gymnasium
Sachsen-Anhalt		Sekundarschule Gesamtschule Gemeinschaftsschule	Gymnasium
Schleswig-Holstein		Gemeinschaftsschule	Gymnasium
Thüringen		Regelschule Gesamtschule Gemeinschaftsschule	Gymnasium

註) Ernst Klett 社のウェブサイトに掲載されている情報に拠り、作成した。

各校種が表す教育内容は州によって異なるが、概ね Hauptschule は 5~7 年の基礎教育、Gymnasium は卒業時にアビトゥアを取得し、高等教育へと進学することを前提とした学校、その他の学校については、職業教育を行ったり、学習状況により進学するか否かを決定したりする教育内容となっている。また、Gymnasium G8 は中級段階 5 年 + 上級段階 3 年の計 8 年間、G9 は中級段階 6 年 + 上級段階 3 年の計 9 年間の教育となる。

引用・参考文献

- ・本論文で比較考察した教科書

HAUN, Anke, a.o. 2013. *Spielpläne* 1. Stuttgart: Ernst Klett Verlag.

NEUMANN, Friedrich, a.o. 2008. *musik live* 1. Stuttgart: Ernst Klett Verlag.

- ・その他

HAUN, Anke, a.o. 2014, 2016. *Spielpläne* 2, 3. Stuttgart: Ernst Klett Verlag.

伊藤真. 2008. 「ドイツ前期中等教育段階の音楽科教科書における楽器学の取り扱いに関する考察」
『中国四国教育学会 教育学研究紀要』54: 573-578.

木戸芳子. 2017. 「ドイツのギムナジウムにおける音楽教育 — アビトゥーア試験問題を中心にして」
『東京音楽大学研究紀要』41:21-37.

中島卓郎. 2014. 「ドイツの音楽科におけるアビトゥア試験内容に関する調査研究(1)」『教育実践研究』
(信州大学教育学部附属教育実践総合センター) 15: 131-140.

———. 2016. 「ドイツの音楽科におけるアビトゥア試験内容に関する調査研究(2)」『信州大学教育学部研究論集』9: 131-150.

NEUMANN, Friedrich, a.o. 2009. *musik live* 2. Stuttgart: Ernst Klett Verlag.

新見徳英 (監修) . 2020. 『小学音楽 音楽のおくりもの』5, 6. 東京: 教育出版株式会社.

NYKLIN Rudolf, a.o. (ed.). 2011. *Spielpläne Oberstufe*. Stuttgart: Ernst Klett Verlag.

小原光一他 (監修) . 2020. 『小学生の音楽』5, 6. 東京: 株式会社 教育芸術社.

SCHULZE, Hans-Joachim (ed.). 1989. *Johann Sebastian Bach. Leben und Werk in Dokumenten*.
4th ed. (1st ed. in 1963). Leipzig: VEB Deutscher Verlag für Musik.

梅林郁子. 2020. 「日独の音楽教科書にみる「諸外国の音楽」の教材内容と指導法: 日本の小学校
5・6年生とドイツの中等教育学校1・2年生の教科書の比較」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』71: 1-15.

若宮由美. 2014. 「ドイツとオーストリアの音楽教科書 — *Spielpläne* と *Klangfarben* の分析」『東京成徳大学 子ども学部紀要』3: 79-91.

山原麻紀子. 2004. 「ドイツの音楽教科書 “*Spielpläne*” における鑑賞の理念と内容」『音楽教育研究ジャーナル』(東京芸術大学) 21: 18-34.

引用・参考ウェブサイト (全て2020年9月8日にアクセス)

Cornelsen Verlag. <https://www.cornelsen.de/>

Helbling Verlag. <https://www.helbling-verlag.de/>

Ernst Klett Verlag. <https://www.klett.de/>

Mildenerger Verlag. <https://www.mildenerger-verlag.de/page.php?modul=GoShopping>

Westermann Gruppe. <https://www.westermann.de/>